

壺井栄論(14) — 第五章『暦』のころ —

A Study of TSUBOI Sakae (14) : At the Time of The Calendar

鷺 只雄

SAGI Tadao

一

繁治、サラリー 昭和13年は栄一家の転機となった年である。ま
マンとなる ず、栄と所帯をもつてからまともに勤めたこと
のない繁治の勤務先が理研(理科学研究所) コンツェルン傘下の富
国工業(株) 調査課に決まった。仕事は国内外の政治・経済・社会
に関する情報を収集して重役に報告し、またそれらを翻訳すること
であった。月給は80円、ただし、13年7月15日から勤めて、月給日
は20日であったが、初月給は50円であったので、栄は夫のもらって
きたまともな月給は初めての経験なので「やはり有りがたい。」と
日記に記しているが、素直な実感であったろう。

入社 of the きっかけは、かつて一緒に活動した小川信一(日本プロレ
タリア文化連盟書記長。本名は磯野信威、父は理研所長の大河内正

敏) が出所後にこの会社の専務となり、その縁で同志の井汲卓一
(のち東京経済大学学長)、大塚金之助(のち一橋大学教授)などと
一緒に入社⁴させてくれたからである。その後昭和15年に同じ理研傘
下の出版社、科学主義工業社⁵に変わったが、一家の大黒柱としての
繁治がサラリーマンとして、きちんと毎月一定の収入をもたらして
くれることは、一家にとってかけがえのない安定を提供してくれる
ものであった。

しかし、それも長続きはしなかった。間もなく太平洋戦争へと突
入し、世間の目が厳しくなるにつれて会社の中でもマークされ、特
に誠文堂新光社の資本が入ってからは社内の空気が一変し、とうと
う昭和17年11月⁶科学主義工業社を危険分子のカードでくびになった。
が、間もなくあるコネで、京橋の北隆館出版部に職を得ることがで
きたが、そこにもかつての元同志、山田坂仁、石原辰郎らが集まっ

てきて、それが社長の耳にやがて伝わったらしく、昭和20年1月25日に反戦運動をやっているとのカドでくびになった。⁷それを機に家庭菜園作りに精を出し、空地を借り、食糧増産をはかって以後勤めに出ることはなかった。

栄、文壇 繁治が勤めに出なくても、お金を稼いでこなくても、**を席捲す** 一家が餓える心配がなくなつたのは、前章で詳述したように「大根の葉」(昭13・9「文芸」)による鮮やかな文壇デビューによって、ジャーナリズムからの注文が殺到といつてもよい程集中したからである。

そのことを何よりも雄弁に語っているのは、「引越し魔」とでも呼んでもよい程よく引越して、上京後初めて世田谷に世帯を持つてから、平均すれば一年に一度は引越していた勘定になり、十五回目の引越しで遂に念願の新居を建てて落着くことになるのであるが、その転々と引越して歩いてきた最後の時期が本稿の扱う時期と重なる。

十四回目の転居先は

中野区昭和通一丁目一三番地

で、昭和13年10月初めから、17年9月23日までここに住んだ。

繁治の旧友で風刺漫画家の加藤悦郎が16年に日本電建から金を借りて中野区鷺宮に家を新築したが、彼が熱心に家を建てることを勧めた。夫婦には最初は持家など無縁のことに思われたが、加藤の話によると、電建の組合に入って十年間毎月月賦で81円ずつ払い、一方一定の建築資金を借用すれば家が建つという月賦住宅である。繁治の月給はその頃「百数十円」¹⁰になっており、栄の方も「方々から

の原稿の注文があり、単行本も幾冊か出版¹¹していたので81円程度の月賦なら支払えぬことはないので建てることに決心し、手続きや土地探しのことは加藤に頼んだ。幸いに鷺宮の八幡様の土地を借地することができて、制限建坪いっぱい三十坪の家を建てて、昭和17年9月24日に越した。家は大根畑のまんなかになり、芋畑や樺林や小藪にとりかこまれていて、こんなに広い庭をもつたのは初めてであった。のち、昭和37年4月中旬にこれを改築した新居が完成¹²し、

中野区鷺宮二丁目七八六番地

これが終の棲家となる。

ところで、文壇デビュー後の栄の活躍ぶりについては、本項の小見出しに用いた「栄、文壇ヲ席捲ス」という宮本百合子の言葉が端的に意を尽くしていると思われる。そこで百合子はこう記す。

栄さんは本月の新潮『曆』百五十枚ばかり、文芸に『廊下』四十枚ばかり、中央公論に『赤いステッキ』三十枚ほど発表しました。これは順々になる筈だったのに先方の都合でミンナ出テシーイマッタというわけです。栄文壇ヲ席捲スと私たちは云つて大笑いな。『廊下』についてはこの前一寸書きました。三つの中では『曆』が一等でしょう。栄さんのものとしてもこれまでの中で一等でしょう。栄さんもこれからが本当のウンウンです。でも面白いと思います。昔、栄さんのところで御飯たべさせて貰つた某女史は、あの栄さんが、と申した由です。文学は普通の人からかかれるべきものです。最も豊富な意味での普通の人から。

文壇登場時の栄のレットルは曰く「台所からエプロン姿で手を拭

き拭き現れたおばさん」、あるいは「文学とは全く無縁の中年の主婦」、「夫と娘一人の平凡なサラリーマン家庭に暮らす三十九歳のニコニコおばさん」という、とにかくお人好しで善良で、どこにでもいる中年のおばさんというイメージであったから、右の引用の最後の部分で、昔、栄にあたたかい御飯を（恐らく赤貧時代だからおかずになしに御飯だけを）たべさせてもらった某女史が、あの栄さんが作家になるなんて信じられない！と叫ぶように、彼女の活躍はめざましく、文壇登場から一年一寸の新人が、昭和十五年二月号の「新潮」「文芸」「中央公論」の三誌に作品が同時掲載という快挙をなしとげたのであるから、「栄文壇ヲ席捲ス」という大袈裟な表現も、あながち揶揄的表現とのみは言い切れない真実を含んでいることも確かなのである。

それでは以下に、その作品について検討しておきたい。

「暦」 「暦」は昭和15年2月1日発行の雑誌「新潮」に発表され、第一作品集『暦』（昭和15・3・9 新潮社）に収録された。

この作品は「新潮」の編集者である樋崎勤から、少し長い小説を書いてほしいという執筆依頼があつて書いたもので、栄の記すところによると「最初は七八十枚の予定であつたのが、書きあげると百枚になり、二十枚だけ縮めるつもりで書き直したら、今度は百二十枚になった。これではいけないと、うんと削って書き改めたところ、百五十枚を越えてしまった。こうなると、何ともしようがないと思つて、そのことを、はじめ話のあつた『新潮』へ申し入れたら、それでもよいと言われたのでほつとした。それにしても私としては惜しくて、思い切り悪く削った部分は今だに心残りである。」とある

ように、佐多稲子と宮本百合子に閲読を請いながら、何度も推敲を重ねたもので、発表と同時に新人作家としては異例と言つてよい影響を呼び、新聞・雑誌での諸評は二十を優に越し、いずれも好評で、これを収録した第一作品集『暦』は翌年二月、その年度（昭和15年度）の最もすぐれた新人に贈られる第四回新潮社文芸賞（賞金千円）を受賞して文壇に確固たる地歩を築いた。

事実と 諸評についてはあとでふれることにして、この作品は栄の虚構の自伝的作品と評されるように、彼女の一家の三代にわたる歴史がモデルにされていることは確かであるが、しかし一体どこからが事実で、どこまでが虚構であるのか、現在のところ、栄研究の立ち遅れから明確にされていないのが現状なので、今後の研究の進展のために、私が現在までに明らかにしえたところを「暦」における詩と真実、あるいは事実と虚構の問題について記しておくたい。

「暦」の日向重吉といねの子供たちは十人、一男九女であるが、これはほぼ岩井藤吉とアサの子供たちに重なる。ただし、栄の場合は同じく十人兄妹ではあるが、二男八女であり、弟が一人いる。これにはエピソードがあつて、「暦」を読んだ友人から、あれを読んだあなたの経歴がすっかり分かりましたと言われて面食らい、また別の友人に、東京にいる弟が結婚することを話すと、相手はびつくりして「だって『暦』の中には弟さんはいないじゃないの」と反問されてかえって驚いたという。¹⁵

栄には作中の七女琴代の代わりに弟の藤太郎がいる。「一」のク

二子は七女シンがモデルであり、実枝は八女貞枝がモデルである。作品はこの二人の妹が祖母の十七回忌と父の三回忌を計画して一族再開の楽しみを果たすところにあるのだが、法事については実際とは符合しない。

栄の祖母イソは天保五年（一八三四）四月三日に生まれ、大正五年（一九一六）十月十七日に数え八十三歳で没しており、父の藤吉は万延元年（一八六〇）四月十三日に生まれ、昭和八年（一九三三）三月十四日数え七十四歳で没している。従って、祖母の十七回忌は昭和七年になるのに対して、父の三回忌は昭和十年であり、くいちがつていて一緒にはならない。

それともう一つ、法事の時期をいつと考えるかという問題があり、これは仮定で考えるほかはないが、フィクションとはいえ実際の父がまだ生きている昭和七年に孝行娘の栄が設定したとは考えにくい。

とすれば父の三回忌の方をとって、作品は昭和十年を現在の時点にしていると考えるのが穏当であろう。これを基準にして作中人物の年齢を実在のそれと比べてみると、中に二、三年の違いのある場合もある（例えば祖母の死は作中では八十五歳、実際は八十三歳というようなこと）が、概ね妥当である。例えばいねは四十七歳で実枝を二月末の真夜中に生むが、実際もその通り（実際は二月二十七日）であり、実枝の二誕生前に半身不随となるのも事実通りである。

作中で全く虚構の人物というのは、四女の八重と生後間もなく死ぬ七女の琴代である。八重は醤油試験場に勤め、カリエスを病んだ経験のある娘で、燈台守の坂田と恋をして結婚し、二年後にはあつけなく死んでゆくのだが、そこにはカリエスを病んだ栄の経験と、栄が島で住んでいる間に見聞した島娘と燈台守との悲喜劇（殆どが

娘の悲劇に終わるのだが）が投影されていると思われる。

五女の高子が栄であり、その「思想犯」の夫高本正昭は壺井繁治である。以下に、まだふれていない人物について簡潔に記しておく。父方、母方の祖父母についての事跡は大筋において事実であり、両親についても同様である。長兄の隼太とその一家（作中では夫の死後妻は再婚して九州に住むことになっているが、実際は再婚して広島に住み、後離婚している）、二女のカヤノ（三女のヨリがモデル）、三女のフサエ（四女のミツコがモデル）、六女のアグリ（六女のスエがモデル）はいずれもモデルを忠実になぞっていると言っている。その点ではクニ子も実枝も同断で（もつとも二人ともモデルをパンだねに、作中人物としてのイメージを存分にふくらませていくわけ）で実像と違うことは念のためにとわっておきたい。昭和十年という時点で言えば実枝のモデル貞枝は既に二児の母である（あるが、長女のミチは五児の母で広島在ということになっている）がこれは大分違う。モデルの長女千代は隣村の林音吉（青山学院卒）と結婚し、夫が旧制中学の教師をしていたこともあって朝鮮・東京など転々としたらしい。その点で作中では別の人物に造り変えられたようだ。それを示すものとして前出の「作者と作中人物」にある次のエピソード「私の実在の姉は手紙をよこし、すつかり自分から作中人物になり切つて（私の創作した事件まで受け入れたかのやうに）、その娘が『暦』をよんで云ふには、お母さんがあるのに自分（その娘）が出て来なかつたと云つたと書いて来た。これにもあいた口がふさがらない気持ちでした。私はすぐに返事を書いた。あれは事実ではありません、小説です、と。」は恐らくこの姉一家に關するものであろう。

作品の「曆」をトーマス・マンの大作「ブッデン・ブロークス」

特徴 比するのは、スケールの点から言っても量的な点から

言っても滑稽であろうが、しかし作の基本精神には通ずるものがある
と見てよいであろう。一口にいってこれは日向一家の興隆と衰滅
の歴史である。子供たちが次々に死んでゆき、親よりも前に半数の
五人は死に（実際は四人である）、その祖父母も、両親も、死ぬと
いうように素材的に見れば極めて暗い話なのであるが、それが陰々
滅々となっていないのは仕掛けがあるからで、始めと終わりに明
るく無邪気なクニ子と実枝のユーモラスな話を置くことによつて明
に転じている。言い換えれば十二章から成るこの作品は、時間的に
見れば「一」「二」「三」章が現在で、その間に「四」「五」「六」
章までの日向一家の歴史がはさみこまれていて、入れ子型の重層構
造になっていることである。

次に指摘しなければならないのは、庶民の生き死にのありようを
たじろがずに見すえていることである。それぞれが生への希望をも
ちながらも、歴史の流れに流されて生きるのが庶民の生きる姿であ
り、十人の子供が生まれながら、その半分は親よりも先に死んでゆ
くというのは、その点で象徴的な風景を示すものといつてよいであ
ろう。

第三は楽天性である。日向家の人々（それは広く庶民一般の代表
といつてよい）の生き方の根底にあるものは明日を支えに生きる楽
天性・向日性である。今日のわずらいは今日で十分、「明日は明日
の風が吹く」（栄の作品に頻出する主人公の愛用語である）、重吉の
言葉で言えば「御破算で行かうかいや」（過去は一切捨てて一から
スタートすることである）ということにほかならない。考えてみれ

ば、浮世の事をクヨクヨと思ひ煩い、ままならぬ浮世の事に思いつ
め、深刻悲壮になつていたら何度心中しても追いつかぬわけで、楽
天的であること、明日に願いをかけて生きることこそ彼らの生きる
知恵なのである。

第四は実枝が、結婚した姉達を見ると、どの姉も皆結婚に幻滅し、
不満をもち、亭主の悪口を並べたてているのを見ると、とても結婚
などする気にはなれないし、「一一」で「女がこんな風なのは一体
どこが悪く、何がそうさせるのだろうか。」という疑問である。こ
れは当時の、昭和十年前後の「家」あるいは「家庭」につきつけら
れた根本的な疑問であり、それは敗戦後民法が改正され、形式的に
は消滅したが、しかし今猶生き続けている重要な問題提起である。

従つて簡単に解決される問題ではないが、その方向だけを示して
おくと、その解決のための方策としては恐らく、(1)男女同権の確立、
(2)「家庭」は男女という共同生活者によつて営まれるものとする前
提の存在、(3)女性の経済的独立、(4)性的分業の廃止などが必要とさ
れるであろう。

しかし、今日ではこの「家」の問題は鹿野政直¹⁶が指摘するように
一層複雑になっていることも確かである。家父長イデオロギーの制
度は表面的には消滅したが、しかし聖化された「母」のイメージは
無傷で残り、むしろ強化されつつあると言つてよいかもしれない。
例えば都市では過労死に象徴されるように、過酷な長時間労働が常
態化して会社ウイドウとなり、農村では出稼ぎウイドウ、つまると
ころ夫シッターの役をおしつけられ、又わが子の育児にのみめり
こむ教育ママとなつて子供シッターと化し、高齢化社会の到来にと
もなつて更に老人シッターというふうには総母子家庭化が進行し、

「マドンナたちのララバイ」がうたうように〈母性〉へのあこがれが称揚され、美德とされ、強化されつつあることは否定できないであろう。

とすれば、そこから脱却する道は、おそらく会社人間という名の奴隷から解放されることから始める以外にないであろうし、閉鎖的なマイホーム意識を解体して、親と子は別の人格であり、子供には子供の人生を選択させる勇氣と決断が必要であり、高齢化社会への対応は、少子化の現実を前提にすれば個人で対応しきれないことは明白であって、社会的なシステム化の実現を期すほかはないであろう。

他に「かやといねと重吉」の三つの死や、セリフのおもしろさ、などふれたいことはおおいのだが、紙数の余裕がないので残念ながら、一つだけユーモアについてふれておきたい。

クニ子が早朝起き抜けに、朝顔の傍で隣家の小学校時代からの同級生に呼びかけてのやりとり。

「下の小母さん、朝顔の花見に来てつかあされ。コノエさん、朝顔が十三センチ五ミリの花が咲いたんで、来て見い。」

「三十（注―こちらはクニ子）とはたち（注―実枝）をすぎたおなごが二人、起きぬけでべも着換えんとからに、十三センチ五ミリの朝顔じゃといや、聞いて呆れら。」

クニ子の世間知らず、あるいは幼児性がズバリ白日の下にさらされて笑いをさそうのである。

同時代評 同時代の諸評の中で注目すべきものとしては、石坂洋次郎「文芸時評(3)―壺井栄への関心」¹⁷⁾が

壺井栄「暦」（新潮）。律儀で勤勉な樽屋重吉夫婦とその両親と一人の息子と九人の娘と―これだけの大家族の歴史を末の二人の娘を中心に描いた百五十枚の力作である。沢山の人物や出来事が随時随所に素直な筆触で手際よく描破され、いささかの渋滞も混乱も示さず、しかも生活に対する作者のほのぼのとした温^{ぬく}とい愛情が全紙に沁み渡つてゐるのが、読後の感銘を一層快いものにしてくれる。優秀な作品である。

だが、「廊下」と読み合わせて作者の将来に就いて考へさせられる問題は、これらの作品は作者があまり苦しまずにおほかたは天成の才にたよつて書き上げたかのような印象を与えることだ。ひつかかるものが少ない、もつと苦渋の跡が見えてもよい、さきざき伸びていくのに必要な心棒があまり細すぎるやうなことはないかどうか。茲に作者の自重を希ふものである。

と云い、高見順は「文芸時評(三)」¹⁸⁾で「暦」は「堂々たる巧さの点で、新人の作品中、否今月の作品中第一等のものである」と正確に評価し、谷川徹三は「文芸時評(2)」の中で「立派に人生の重さを感じさせるもの」と評価する。

瀬戸内海の島で、十人の子供を生んで育てた樽屋の夫婦とその子供達の大きくなつてからのそれぞれの生活を描いたものがある。（壺井栄「暦」Ⅱ新潮）若い時、船乗りのその夫を他国

で失つた祖母―彼女は息子を伊勢講のくぢ当りで伊勢詣りに行かせたついでに、自分では詣つたことのないその夫の墓石の下
の土を一握り手拭に包んで持つて帰つてもらふ。

その土をぢかに両手に掬つて、「これでお父つあんも安心したらうわい」と息子の顔を眺め入る。そして何十ぺん、何百ぺんとなく次々に生まれる孫達にその夫のことを話して聞かせる
「甚作どんはなあ」と、若い頃から口ぐせで口を切ると、孫たちはもう次に来る言葉を宙で覚えこんでゐるので、代る代る、ひきとつていふ。

「コロリにかゝつてな」「イセのマトヤで死んだんぢや」「ヒヨリヤマといふところに墓があるせになあ」「大けになつたら皆金を儲けてな」「墓いまるつて上げよ」「おぢやん、お前の孫が来たぞよ、云ふてな」「小んまい石塔に、小豆島甚作、云ふて書いてあるといや」

これらの挿話は私の心を動かす。街頭で何気なく見過ごしてゐる風景の中にも深い生活の背景のあることを教へたり、遠い昔の今は忘れてゐる牧歌を想起させるのはいつの世にも文学の功德となつてゐることである。

私はここで二つの例を引くのに知らず知らずの内に同じ作家のものを引いたが、この作家は、私が今度始めて読んで最も心をひかれた作家だつたからである。殊に「暦」の一作はこゝに引いたやうに挿話の美しさを離れて立派に人生の重さを感じさせるものであつた。

丹羽文雄「見たもの・読んだもの―壺井栄『暦』」²⁰は

壺井栄の「暦」を読んで、感心した。最近雨後の筍のやうに現れる女流作家の中で、この人と真杉静枝がずば抜けてゐる。「暦」にくらべると、男の作家も女の作家もひどく埃っぽくて、ぎくしやくしてゐるのを、今更のよう感じた。女であることと作家であることが、このやうにびつたり溶け合つてゐる点で、壺井栄と真杉を挙げるのである。

と高く評価する。浅見淵もまた「文芸時評」²¹で

壺井栄は今月三篇の作品を発表してゐる。いづれも相当な作品で、「大根の葉」から出発したこの作家は健全な成長振りを見せてゐる。その中で「暦」（新潮）は百五十枚といふ力作であるが、力作だけに最も読みごたへのある作品である。ムラのない作家だからだ。子沢山のところに特徴のある、平凡な家庭の波瀾に富んだ流転史を描いてゐるのだが、それを善意を中心として描いてゐるところにこの作品の新鮮な特色があるのだ。つまり、生得の善意のために、一見悲惨に見えて決してさうでない幸福な凡人成仏をとげる人々を描いてゐるのだが、その幸福感が素直に読む者に迫つてくるのである。功利感のない善意の美しさといふものを、この作品のやうに見事に結実させてゐるのはじつに珍しいと思ふが、そして、その点、今月第一の佳作であるが、これは多分に作者の人柄からも来てゐるやうに窺はれる。

「今月第一の佳作」とする。

諸評は他にも多数あるのだが、以上で紹介は打ち切つてポイントを整理してみると、〈人生の重さを感じさせるもの〉、〈堂々たる巧みさ〉、〈善意の美しさ〉等に要約されるかと思われ、しかもそれらは妥当な見解であろう。

そういう中で、右にあげた諸評は主旨好意的であるが、中にはきびしい批判や意見も寄せられた。その代表的なものは〈限界説〉である。例えば浅見淵²³は

壺井栄は題材的に限界を持つてゐる作家ではないかといふことである。即ち、飽くまで善意の作家で、その善意を生かし切れる題材でなくては完全に特色が出ないのではないか。その点、題材の拡充乃至発展といふことよりも、善意を深化さすことによつて独特の持ち味を齎す作家である。

と指摘し、「I・S」は「文芸」²⁴で

「新潮」で壺井栄の「暦」を読む。大変たのしく読めた。なぜこの作品は楽しいのか。別に読むものを楽しませる材料を扱つてゐるといふわけではない。ただこれは作者が長い間温め、醗酵させた材料だといふことだけがよくわかる。(中略)作家はある人間、ある事件を描くにも、相当地に長い年月の反省を持たなければ円熟した選択をすることができないのであらう、それとともに、さういふ古くから持つてゐる醗酵し切つた材料を出しつくしたときなほ多作しつづけねばならないとしたら、どうなるだろうと考へた。さういふ場合に、作家が何か主張すべき理念を持たないとすると、

毎月数多く見る空まはりした風俗描写だけの作品が次々と作り出される危険があるのだらう。この作者はさういふ危険に陥るだらうか、どうだらうと考へた。

栄の将来への危惧を強くなげかけている。デビュー前後の栄の作品は主旨このような善意をふりまわし、これ見よがしにしないものでもなかつたから、これに反発を感じる人々がこのように批判することはある意味で当然であつたらう。

加えて、〈長い間温め醗酵させた材料を出し尽くしてなお多作を強いられる〉としたら、そしてその場合作者に主張すべきイデオロギイ・思想・主張・理念等何と呼んでもよいが、今仮にそれをイデオロギイと呼べば、がなかつたとしたら――そしてその機会の到来は決して遠い将来などではなくて、すぐ身边に迫つた喫緊の問題であるとしたら、如何に対処すればよいかというのは大問題であつた。

更に、栄に対してしばしば言われる「構成力に問題がある」「作品の骨格が弱い」「今後の発展性に疑問がある」等の問題が絶えずまとわりついていて、一見順風満帆のように見えるその裏側にさまざまな問題が解決を迫つて山積していたのである。

「赤いステッキ」次に「赤いステッキ」とその系列の作品をとりと「廊下」あげたあと、「廊下」にふれることにしたい。

2 「大根の葉」(昭13・9 「文芸」)から「赤いステッキ」(昭15・2 「中央公論」)に行くのではなく、その前に栄は「風車」(昭14・3 「文芸」)を書いているので、同系列の作品としてふれておきたい。

所謂、「克子」ものの第二作で、先天性白内障で盲目の克子を、手術して水晶体の濁りをとれば見えるようになるという医師の言葉を信じて手術を重ねた結果、予期した程度よりは遙かに低いが、漸く弱視程度の視力を得た克子の性向とその日常の哀歓を、主として母親の視点から点描したものである。

克子とはかく気が強く、決して泣かず、一歳の兄の健と取っ組み合いの喧嘩をして健を泣かせてしまふのがいつものパターンである。母親はそういう日常を見ていて克子の特徴、あるいは個性は、第一に攻撃性——いきなり噛み付いて菌型をつけたり、ケンカをししかけたりすることにあり、第二に気性の激しき、強き——噛みついた口をヒネられても泣かず、罰として庭の梅の木にしぼりつけられても耐えて泣かない——そういう強き、我慢強き、あるいは忍耐力が彼女の生きてゆける原動力になっているのかもしれないと改めて思うのである。

第三に健との関係では、女王様、あるいは支配者でいたいという願望が強烈で、例えば健の読んでいる本をいきなり取り上げて、健ちゃんもタモタモしてよく読めていないねえ、どれ私を読んでやるというふうにするのであつた（無論克子は字は読めず、知っているのは暗記している部分のみである）。

第四に頭の回転が早いことで、健が折紙で遊んでいて、克子に好きなものを折ってやるから何でも言つてごらんと言うと、克子はウソをつくと一〇〇円貰うぞと約束させてから「海、折れ」とせまるのである。

そういう克子を将来どう育てるかについて両親の考えは違つている。父は克子が不具者であり、厄介者であるから、一生面倒見る健

がかわいそうだ、アンマになんかさせたくないというのに対して、母親の方はメクラだから一生厄介者だというふうに受身で考え、宿命の一生を送らせるのは御免だ。第一メクラと決まつた訳ではないし、厄介者として生きてきめてかかるのか？ 私はメクラならアンマにさせる。アンマのどこが悪いのか？ 昔、神戸で一度頼んだアンマは、兄も義兄も失業中だが、私は立派に働いて食べてゆける、これもメクラのお蔭ですと語っていたではないか？ だから私はメクラであつても幸せになれる子に育てたい、ふさわしい相手をみつけて人並みのしあわせを見つけられる女に育ててやりたい、ということに「風車」一篇の眼目は託されているようである。

とりわけ、作中で健と克子が遊びの中で、時化の様子を再現して見せる場面は生彩がある。子供というものは夢と現実との区別がつかないところに生きていくわけで、二人が遊んでいるうちに次第に時化に呑みこまれ、同化して夢中になるシーンはインパクトがある。しかし、全体的な出来ばえからすれば、「大根の葉」より落ちることは認めざるをえない。

但し、誤解のないようにはつきり言つておかなければならないのは、〈克子もの〉の提起する問題は、一般にそれまでの日本では、不具の子をもつた家ではそれを恥じて隠そうとし、小さくなつてひたすら世間を狭く暮らすのが普通であつたが、〈克子もの〉一系の作品では敢然としてこれに挑戦し、そういう生き方は無意味であり、それを続けている限り何ら問題の解決にはならないことをはつきりと提示した点で歴史的な意義をもつていふことを言つておきたい。

この作品についての評は少なく、網野菊は²⁵

新進の壺井栄さんのものは私は「文芸」にのつた「風車」しか読んでゐないのだが「風車」の真摯さ、考え方の積極性に感心した。

と評し、大谷藤子²⁶は

壺井栄氏は、よい素質の作家である。「大根の葉」から「桃栗三年」にいたるまで、発表した作品の数は少ないが、地道な、味はひの深い、素質のよさを見せてゐる。しかし、同じ題材ばかり手がけるところに、この作家の狭さを感じられるやうで惜しまれる。

「素質のよさ」と同時に、「同じ題材」にばかりよりかかる「狭さ」についても指摘しているが、この後者の問題については他の評者からも指摘されていることなので後に論じることにしたい。

「赤いス これは「中央公論」(昭15・2に発表された作品)で、テッキ」五歳になる目の悪い(先天性白内障でこれまでに何回か手術をしてようよう弱視程度にまで視力を得ることができたが、普通の生活をするにはまだまだ何度かの手術が必要である)克子が母には心配のタネである。兄の健と克子は互いにはりあって、すぐ喧嘩になるのが毎日の事。父は都会で職を探すが何年もの間なく、やっと見つかった仕事は新潟の高田。豪雪地帯なので母はしづる。結局一家は高田へは行かず、健は村の幼稚園に入り、その日、園であつたことを帰宅して話すと、克子はそれを全部自分の経験として

母に話す。母は克子に盲学校行きをすすめ、学校から赤いステッキを貰つて歩いて歩くと、自動車はよけてくれるし、イジメもなくなるぞと話すと、行くと承知し、その日以来、赤いステッキは「万能の杖」となる。

〈克子もの〉にはモデルがある。母は栄の一番下の妹、貞枝。その夫は繁治の甥戎居仁平治で、昭和5年早大の英文に進学するが在学中に繁治の影響もあつてプロレタリア運動に走り、ために昭和9年卒業後は定職につけなかった。一方、昭和8年貞枝と学生結婚²⁸(しかしこれは親の承諾を得ない、披露宴もないものだったのであと戎居家との間でモメる)し、妻は小豆島、夫は東京と別居結婚になる。同年の9月27日長男研造(健のモデル)が、10年3月7日長女発代(克子のモデル)が、生まれ、仁平治に生活力がないため、従来通り別居のまま、貞枝の毛糸編みの内職で糊口をしのいだ。昭和14年から新潟県立高田中学校英語教師³⁰となり、単身赴任。翌年三月、手術で目の見えるようになった克子を連れて貞枝と健が仁平治の赴任先高田へ向かった。栄もそれに同行した。理由は貞枝がまもなく出産をひかえた身重の体であることを案じたからで、二ヶ月先の5月6日には二男の光多が生まれた。

しかし悲劇は更に続いて、光多もまた発代と同じく遺伝による先天性の白内障であることが判明して、夫婦はどん底につきおとされる。

悲嘆にうちひしがれている妹を励ますべく栄は執筆で忙しい中を、手紙で勇気づけたり、あるいは直接家に訪ねて援助策を協議したりしている。

栄の貞枝一家に対する関心、というよりも愛情といったほうがよ

り適切と思われるが、その愛情は言わば「暦」に描かれたような、栄が事実上の一家の大黒柱として一家を支えていたわけで、その延長から母の死後はシンと貞枝の二人の妹を東京に引き取って、それぞれ戸板裁縫学校中等教員養成科二年課程と常磐松高等女学校（のちトキワ松学園と改称）に進学させたことが示すように、その間柄は姉と妹というよりも、保護者である親と娘の関係というのがピッタリすると思われる。

実際、発代のこの時の手術費用（昭和14年11月に貞枝・健・発代が上京し、15年3月まで滞在し三回の手術をして弱視程度に見えるようになる）一切は栄の「赤いステッキ」の原稿料でまかなわれた。執刀医師にも恵まれ、この話を聞いた中野重治から大学時代の同級生で池袋に眼科医の名医がいるから紹介すると言われ、同郷の知人藤川栄子からも名医を知っているから是非紹介したいといわれ、どちらにしようかと迷ったが、藤川の方が近いのでこちらに頼んだところ、実は双方共推薦していたのは同一人の近藤忠雄医学博士であることがわかって、大笑いとなった。

その後、光多の手術は、栄の第一創作集『暦』（昭15・3・9新潮社）が翌年2月10日に第四回新潮社文芸賞（賞金千円）に思いがけず決定し、多額の賞金が入ることになったので、手術を発代の時の近藤医師に頼んだ。

昭和16年3月下旬、当時夫の転勤で熊谷に住んでいた貞枝母子を呼び寄せて手術に入るが、子供の風邪などで入院が二ヶ月近くになり、その上、消化不良を起こして5月12日に急逝して、徒労に終わった。

そのため、このシリーズは「大根の葉」「風車」「赤いステッキ」

から「窓」（昭15・8）「霧の街」（昭16・9）と続いて一先ず終了する。

さて、モデル問題が長くなっていたが、誤解のないようにその件についてははっきりことわっておきたいことがある。

それは「大根の葉」以来の一系列の作品、所謂「克子もの」と呼ばれる作品は、状況的には栄とその妹の貞枝一家をモデルにしていることは明らかであるが、しかしこれは断じて私小説ではない。

その最大の理由は、決して現実の再現を企図してはいないし、現実再現型の小説を書くようとしているわけではないからである。

つまり、作中における主張や意見や事件等々は実際にあつた事ではないし、そういうことを主張したり、まくしたてたり、内心で思惟した人がいたわけではないし、否、むしろいなかった、だから猶更作者は書きたかつた、そういう願望、そういう善意主義、あるいは理想主義の推進によつてつくられてゆく社会の現実こそ作者の庶幾したものにほかならないからである。

同時代評　まず、丹羽文雄³⁴の苦言から。

しかし壺井栄の「赤いステッキ」は、困る。もつとつつ離してほしかつた。以前にこの作家の矢張り子供を題材にしたものを読み始めたが、「赤いステッキ」流の甘へた調子に参つて、二頁でやめてしまった。たとへば「赤いステッキ」の地の文の中で、「お母さん」と書いて母と子を描いてゐるが、わざわざ「お母さん」にしなければならかつたのか。母と書くだけでよい。名前を書か、または彼女でもいいのだが、特に「お母さん」で続けな

ければ味が出せないと思つてゐるなら、困りものだ。「暦」にはそんな感じがなかつた。小説はそんな「お母さん」から一足ふみだしてゐるものではないか。何でもないやうなことだが、その感じが一篇に滲み渡つてゐることは、危険だ。

こうした批判は他にもあるが、しかしこれには次の大山定一の評³⁵がもつとも正解と考えられるので次に引いておきたい。

誰だつたか、或る雑誌の批評で、「お母さんは克子をおんぶして、健の手を引いて出かけた」といふ壺井氏の文章を非難してゐたのをみたことがある。「お母さん」など書かずにもつと突きつめて客観化して書かねばならぬといふのである。「お母さん」といふ書きぶりには、何か甘やかされた微笑をさそふものがあるのは事実だし、この非難は尤も千万な申し分にちがひない。しかし僕がすぐそれに首肯できなかつたのは、そうしたけちけちした批評が従来日本の小説をどれだけいぢけさせて来たかといふことを考へてみたからである。僕は却つて「お母さんは――」と書いた筆のむかうに、よごれない初々しい生きた心情を予感した。それを無残にむしり取るのがまつたうな小説の道であるかどうか。

むしろ、この心情はすくすく自由に伸ばし切らねばならぬと僕はおもふのだ。「暦」といふ作品を他の初期のものど並べてみると、壺井氏が「お母さん」と書いたやさしい、しとやかな、女らしい心情をどんなにひとりで大切に苦勞して育ててきたか、よくわかる気がする。

はげしい運命の変化や狂つたやうな情熱や、無残に突きとばし

た冷酷さがなければ、小説を読んだ気持ちかせぬといふ人もあるにはちがひないが、僕はこのすぐれた短篇集の、静謐な、一様な、水のやうに湛へられた生活と日常の深い心やりを、無邪気な、すこしもくもりのない一般小説読者の胸に推したいとおもふのである。

次いで書かれた「窓」(昭15・8「改造」)は、克子の眼の手術をするのによい医者が見つかったから上京せよとの連絡が入つて、去年の秋の末に、姉の家に千枝母子は三人で厄介になり、三回の手術を経て遠視の眼鏡をかければ何とか見えるようになり、翌年二月半には夫の任地雪の高田に住む。雪国の暮らしは予想に反して楽しく、喜ぶ。五月に入つてすぐに男の子(幸多)が生まれ、安産でホッとするが、この子もまた先天性白内障で見えないことがわかつて、千枝はショックで二日二晩泣き明かす。夫の曾祖母がソコヒで、その遺伝であつた。知らせを聞いてとんで来た姉のはげましで立ち上がろうと決意した千枝は、それを姉に語りかけるといふのが梗概である。

千枝の一家にとってはここ数年の痛切な苦しみが、克子の手術とその成功によつて、眼鏡をかければ一先ずは見えるところまで行きついたことによつて小康状態を保つことになり、加えて夫の就職がきまり、初めてささやかな幸福を手に入れることになつたのが、それも束の間、新たに生まれた第三子が克子と同様先天性の白内障と氣づき、不幸のどん底に突き落とされるわけで、そこから姉のはげましによつて、再生のきっかけをつかむまでを描いている。

前半の克子に関わる部分は、これまで同様生彩があるが、後半の

千枝が立ち上がる過程については問題があろう。

というのは、「大根の葉」では愛児の目を何とか見えるようにしてやりたい、という母の一念から健の母は行動を起こし、周囲の無理解を打破し、夫の実家から手術費用を出してもらうことに成功する（将来は小さいながらも家一軒分位建てる費用は兄として分けてやるつもりであったが、それよりも眼の手術代の方が急用というのであれば、それに使うのもあなたがたの自由——ということにして財産分与の前払いという形で協力してくれた）わけで、ここに特徴的なのは現実に対する認識力の確かさ、判断力の確かさ、行動力の遅しきであらう。

これが母の一途な愛情とマッチして周囲を動かし、読者を動かす原動力となるものであらう。

ところが、「窓」の場合はこれとは全く対照的なのだ。千枝が妊娠中ということは考慮しなくてはならないにしても、現実と接触するあらゆる局面で、「大根の葉」における認識力・判断力・行動力が眠っていて発揮されず、殊に最も肝腎な幸多のソコヒを知った時の周章狼狽ぶり、完全にうちひしがれてしまつて再起不能の態をさらしている姿は全く別人としか言いようがないからである。はつきり言つてしまえば思考停止、行動忌避、人格崩壊と言つて差し支えない状態だからである。

コラム「槍騎兵」の「竹賢人」³⁶は

壺井栄「窓」は、現代の人情作家だ。知性の文学がつひに評判倒れに終り、横合ひからかう云ふ人情小説が現れて、人々に迎へられるのだから、文学の神様は天邪鬼だ。

と揶揄し、「w・w」³⁷は

壺井栄「窓」白内障の子供を書いて痛々しい作品だが、作者の考へ方にはかなり作爲が目立つてゐる。殊更、明るく考へようとしてゐるからである。現実に対してはヴィヴィッドな描写力を持つ作家だが、現実に対する思考力はその割りに薄弱である。克子という子供は、可憐に、生きて動いてゐる。作者の持味にぴつたりしてゐるのだ。持味に閉ぢ籠つてゐれば間ちがひはないがそれだけでは物足りないといふのが、我ひと共に認めるところであらう。

栄の欠点を正確に指摘している。また、「R・S・T」は「竜頭蛇尾の典型壺井栄」とし、デビューの頃の賞賛作は夫である繁治の代表作ではないかという推測もあることを紹介しつつ次のように言³⁸う。

竜頭にして蛇尾なること女流作家壺井栄ほど著るしきはない。「大根の葉」「赤いステッキ」等で文壇から賞讃を受けたが、しかし最近作『柳はみどり』『艦』などになると、彼の女が賞讃に値せぬ下手糞な作家でしかなかったことが暴露された。そこで先に賞讃を受けた諸作は彼の女自身の作ではなく彼の女の作に擬してその夫、即ち旧左翼作家壺井繁治が書いたのではないかといふ推測も、あながち根拠なき浮説と斥けることは出来ない。

といふのは、彼の女の好評を博した諸作がいづれも女の立場で

書いてはゐるが、いはゆるリアリズムの作品で、女らしい心理のニュアンスも、女でなければ見られない特色もないからである。生まれながらにして不幸を負うて来た子に対する母の罪障感を表現することは、彼の女の好んでやるところで先天的白内障の子をもつた母の苦悩を描いたものも二三篇あるし、丙午の娘を二人もつた親の苦悩を描いたものもあり、今度は人並はずれの人中へなご出られない男の子をもつた母親の心情を描いたものも発表した。さう次ぎ次ぎに母の罪障感をとりあげるところに、何か彼の女が強く感じたところがありさうに思はれるが、壺井繁治といふ人の家庭について知らない私は、それをこゝでいふことは出来ないうが、さういふ哀歎はもう一二篇で沢山であるのに彼の女は好評に酔つて凶に乗つたのか、もつと強く読者に懇へねばならぬと思つたのかは知らぬが、『窓』の如きは、一人の子が白内障で悲嘆にくれてゐるところへ、新たに生れた子がまた白内障だつたといふ悲劇を描いた。なるほど人の親の感情として、子に対する責任感といふやうなものは肯かれるけれども前からの作品を読んでゐるものにとつては、これでもかこれでもかと思ひてゐるのではないかと思はれる。

過般『改造』の文芸時評で杉山平助がこの作を絶讃してゐるが、恐らく杉山氏は、これだけを読んで前に同じやうな作がいくつもあるといふことを知らなかつたにちがひない。知つていたら私同様又かと云つて苦笑するにちがひないのである。

一体いゝ作家といふものは、その作品が多様性をもつといふことも一つの条件でなければならぬ。如何なるむづかしい事件でも複雑を単純化して表出しようになることは作家修業の一の

峠である。壺井はスタートの諸作が好評だつたのに氣をよくし、発表慾にのみ駆られて足が宙に浮いてゐるのかも知れないが、この程度の力量や手腕で有頂天になつてゐる姿はあんまり見いゝものではない。安手な、薄つぺらな作を矢継ぎ早に発表するより、ぢつくりと腰をおちつけて人を驚倒するやうな一作を一年に一篇でもいゝから示すべきであらう。さうしたら夫君繁治が代作したといふやうな浮説は、根もないことゝしてふつとんでしまふにちがひない。(R・S・T)

繁治代作説というのは、今日から見れば笑止の沙汰、噴飯物といふ他ないけれど、当時は一部に根強く存したことも確かなやうである。

この論者の説く所は何ら根拠のない浮説であつて、そういうものとして引いたのであるが、唯一つ眞実として買うことができるのは「ぢつくりと腰をおちつけて人を驚倒するやうな一作を一年に一篇でもいゝから示すべきであらう」という指摘である。

「霧の街」(昭16・9「知性」)は千枝が東京の姉から思いがけぬお金が入つたからそれで幸多の眼の手術をしようとの誘いで母子三人で上京し、克子の手術をした近藤医博に依頼して手術は成功したのだが、幸多の体調が不良で、その上消化不良をおこしてあつたう間に死亡し、故郷に納骨に行く顛末を書いたもので、連作の第五作目ということもあつて流石に手馴れていて、殊に最終章で、郷里の祖母の孫に寄せる哀悼の風習や言葉は肺腑をえぐつて哀切である。

迎えに出てくれていた近所の人たちにききますと、電報が着いた夜、おばあさんは家のまわりをぐるぐるかけまわりながら大声を上げて、

「幸多、幸多、早う戻ってこい、幸多よ。早う戻れ、おお戻ったか、戻ってきたのか。」

と泣き叫んだのだそうです。あまり突然だったので、近所の人たちは、気でもふれたのかとおどろいたそうです。私は知らなかったのですけれど、異郷で死んだ者は、すぐに魂がふるさとへ戻るのだと信じられているようです。そして、迎える者がないと迷うので、そういつて雨戸や窓をあけて呼び入れるのだそうです。³⁹

おばあさんは、

「幸多はかわいそうだけど、健や克子に死なれてももつと困る。耕治や千枝だと、とほうに暮れんならん。幸多でよかったというわけではないが、幸多が一ばん軽役じゃから、あきらめよう。だけども、誰にでもそういつてしまわれる幸多であるから、わたしやおのこと、かわゆうて、かわゆうて。」

といつて泣きました。私ははじめて満足したのです。⁴⁰

管見の範囲で、この作品にふれたものは平野謙「教養時評—文芸⁴¹」のみである。

壺井氏の『霧の街』は、『大根の葉』にはじまり『風車』『赤いステッキ』『窓』につづく連作のひとつ、と作者自身で附記してあるやうに、めしひた少女とその哀れな母親の努力を中心にした、

あの一連の作品の最後に位置すべき力作である。ますます円熟して来た筆遣ひのうちに、生きんとする人間の努力の空しい美しさをみなぎらせて、まさにこの作者の独壇上である。何度も取りあげた題材だけに、ともすればマンネリズムに陥りやすい危険からよく救つてあるものは、この作者独得のはりつめた人生的実感にほかならない。

平野は栄の出発期からの好意的な批評家で、ここでも「力作」「独壇場」「はりつめた人生的実感」等々の評語を用いて賞讃してくれてはいるのだが、率直に言つて過褒の言と思われる。そのことを何よりもよく証明するのは作品の末尾に附せられたこの連作の打ち切り宣言である。

作者附記—この一篇は「大根の葉」に始まり「風車」「赤いステッキ」「窓」につづく連作の一つであり、私はこれを以て一応この連作の形式を打ち切るつもりである。⁴²

「大根の葉」以後、このシリーズは回を追うごとに力が落ちてきているわけで、打ち切り宣言は妥当というよりも、むしろ遅きに失した感がないわけでもない。

ところが、この打ち切り宣言の舌の根がかわかぬうちに「眼鏡」〔A—小説・克子もの〕昭16・11 「日本女性」が発表される。それは幼稚園に行くようになった克子が、強度の弱視用眼鏡をかけているために、子供たちからイジメにあう話を克子の言動を中心に成長記録風に描いた作品であるが、これは一体どういうことである

うか。無論、そのことについてのことわりが全くないわけではない。「大根の葉」から「風車」「赤いステッキ」「窓」「霧の街」「眼鏡」(A—小説・克子もの)の六作品を収録した作品集『ともしび』(昭和16・12・26 博文館)のあとがきの中で栄は次のように記している。

せめて、この一巻が、今はまだ幼い克子やその兄妹たちの将来に於て、生活へのともしびとなつてくれることを希つてやまない。また、克子は、来春早々私の家へ来ることになつてゐる。出来ることなら、麻布の南山小学校—今ではどんな名の国民学校になつてゐるか—の、「視力保存学級」へ入れてやりたいと思ひ、克子もその希望をもつて私の家へ来るのである。彼女の永い将来に於て、克子は必ずや私の生活のともしびともなるであらうし、私の文学もまたそこから新しく芽生えて来ないとも限るまい。

「霧の街」は「知性」に発表した。そしてその後記を無視して、早急の間に「眼鏡」をかき、これは「日本女性」に出た。「眼鏡」については、云ふべき何もない。この場合、私は珍しく他の題材に向ふ時と同じやうに、自分の想像を主として書き上げた。

眼鏡をかけた克子が、今後どのやうに進み、又どんなにして起き上がるか、そして私はその克子にどんな風にして手を貸し、どんな言葉で励まし、希望を持たせてゆくか、母代りとなる私に課せられた今後の任務である。と同時に、励まし教へられるのは、或はまた私のほうに多いかも知れない。これは私の側からだけ云へることではないと考へてゐる。おそらく克子は、私の先に立つて歩く子になるのではないかとも思はれる。又克子の母は、どん

な気持ちで克子を手離すか、それも私の心に残される問題である。⁴³

ここで栄は明らかに状況が変化し、それに伴つて考えも変化したことを表明している。

即ち、『ともしび』のあとがきによれば、克子は昭和17年の春には熊谷から鷺宮の栄の家に来て、麻布にある南山小学校の「視力保存学級」に入学させる予定になつたことが一つ。⁴⁴

従つて第二に、栄は今後、妹の代りに、克子の「母代り」になるわけで、「克子にどんな風にして手を貸し、どんな言葉で励まし、希望を持たせてゆくか」、課せられた任務の重さを感じ、第三に、克子は将来「私の生活のともしび」ともなるであらうし、「私の文学もまたそこから新しく芽生えて来ないとも限るまい。」として、克子をひきとつて母として暮らす生活に新しい希望をいただき、さまざまな夢を見て、遂にそこからおれの文学の新しい「芽生え」をまで期待するに至つたことを証している。

とすれば、「霧の街」の「あとがき」執筆時点とは明らかに状況が変化し、認識も変わった以上、その「あとがき」は反古でしかない。

それ故「その後記を無視して、早急の間に『眼鏡』をかき、これは『日本女性』に出た。」と書けることになるのであると思われ、それが、それにしてもこの考えの変化は余りにもめまぐるしいというか、性急といわざるをえない。そこには如何なる要因があつたのかは不明だが、内的必然性がある限り変更は自由だが、しかしこのよ

うな短期間での変更には余り期待できない事は当然であらう。事実、以後「克子もの」にこれらを超えるものはない。

「廊下」 最後に「廊下」(昭15・2 「文芸」)について述べておきたい。この作品はプロレタリア文学運動をしていた貫治が官憲の拷問によって中耳炎となり、その手当ての不備から悪化して闘病生活を続け、遂に、32年の生涯を閉じるまでを妻シズエの視点から冷静な筆致で描いたもので、膨張する軍国主義の制約の中で一つの達成を示すものといつてよいであろう。

無論、後に掲げるように評家の指摘するさまざまな欠点——主人公の立体感のなさ、生活と心情の造型不足、背景描写の不十分さ等々のあることは十分承知の上で言うのであるが、もし評家から指摘されるような如上の指摘が十分満たされた形で表現されたならば、素材の性格から言つて当然国家権力との闘争や政治批判・社会批判が奔出することは必然であつて、そうした作品が準戦時下に入つていた商業文芸誌に掲載可能か否かは一目瞭然である筈である。

当時の良心的な作家にとつては、準戦時体制化で、検閲の網が張りめぐらされている中で、いかにそれをかいくぐつて精一杯の表現を獲得して読者に伝えるかに努力を傾注していたのが実情なのであつて、それを無視して何の制約もない平和な日常にどっぷりつかつた時代的条件考慮なしの、紋切型の発言には呆れざるをえない。次の山室静の前半はよいのだが、後半はその例と断じざるをえないであろう。

壺井栄「廊下」

今年度のすぐれた作品に数へられるものと思ふ。筆致に若々しく美しさといふやうなものはないが、なだらかでありながら、軽

くはなくて落着いた厚味を持つてゐる。そして作者の深い感動が底に流れこんでゐる。恐らく切実な体験の止むにやまれぬ記録なのであらう。古い言葉で言へば、これは一つのヒューマン・ドキュメントである。貧苦の中にせい一杯に生き戦つて行かうとする一詩人が酷烈な生の轍に碎かれて行く、それを見とる作者の心ふかく熱い愛と抑へに抑へた憤りと慟哭が波うつてゐる。暗い生の現実である。しかしまた熱い人間の愛が灯を点じてゐる。それが作品をも救ひ、生の喜びをも遠く感じさせる。

欲を言へば、もつと主人「公」らの生活と心情の背景が示さなければならぬ。ここに描かれてゐるだけでは詩人の現在が十分に読みとられ浮び上がつてくるとは言へない。従つて彼の烈しい慟哭がいくらか唐突に不自然になつてゐる。ある程度読者はそれを想像によつて補ふことは出来るが、それにも十分な手がかりを与へられてゐると言へない。闘病生活、病院生活だけが前面に出てゐるので、それがこの素材の既に持つてゐるものをも却つて狭くしてゐる傾きがある。作品としてはかうするのが、纏めやすいのであらうが。

この素材をもつと過去にまで遡つて、主人らの生涯を内面的に跡づけ、その様々の悲喜を彼の成長と挫折に於いて描き出すことに成功すれば、私達はこゝに現代といふ時期に於ける一つの魂の烈しい戦ひと受苦のすぐれた記録を受取ることが出来よう。⁴⁵

実は「廊下」にはモデルがあつて、それは宮城県生まれで北海道育ちの詩人、今野大力(一九〇四—一九三五)である。彼は始め「文芸戦線」の詩人としてスタートするが、間もなくプロレタリア

作家同盟に加入し、「戦旗」などの編集活動に参加し、その責任感の強さ、誠実な仕事ぶりで忽ち戦旗社内でも頭角をあらわし、信頼される人物となった。

繁治はその頃戦旗社の経営責任者であったところから関わりが深くなり、やがて宮本百合子が初代編集長（のち佐多稲子）の「働く婦人」（昭7〜8）で精力的に活躍し、まもなく栄もその雑誌を手伝うことになって交わりは深くなり、今野の拷問事件による入院、退院後の壺井家での静養、脳膜炎での慶大病院への入院、退院から結核を再発、小金井の借家住居で療養するも悪化の一途を辿り、昭和十年六月に国立療養所中野病院で三十一歳で没した。

プロレタリア運動の冬の時代に闘病生活を送り、病死したために永らく無名のままであったが、戦後再評価⁴⁶された。しかし、研究はまだ緒にいたばかりである。

私が新編の『壺井栄全集12巻』（'97・4・1〜'99・3・15 文泉堂出版）を編集、刊行中に新しく発見した新資料中に、今野大力の慶大病院入院に関する督促状、領収書などが七通壺井家に残されているのがわかり、また新出の栄書簡によって、今野の慶大病院は昭和7年7月4日（従来は「七月」または「六〜七月ごろ」）で、退院は同年9月27日（従来は不明としてふれていない）であることが実証的に判明するのを始めとしてこの前後の事情が手にとるようになることである。（スポンサーは宮本百合子であり、間に立った使者は栄である）。

これらの新資料を含めて月々の今野大力の生活費・医療費を届けるのが栄の仕事であり、その間の観察・感想・印象、今野の詩の特徵と生涯を概観したものを拙稿「壺井栄論¹²—第三章激流（三）—」⁴⁷

で論じたので、そちらを参照願うとしてここでは繰り返さない。

〈善意の人〉〈善良の人〉 最後に、登場期の栄について最も多く発言人という誤解 が寄せられ、そしてその作家としての将来

に危惧を寄せられたのは何であったか（極めてお節介な、余計なお世話なのであるが、その将来について危ぶみ、限界を論じて栄が苦勞するのを気の毒がる論者が非常に多かったのが特徴である。中村地平⁴⁸のように「この人は相当の年配になって小説を書き始めた、と聞いてゐますが、恐らく性格的に話し上手なのでせう。換言すれば産れながらの小説家なのでせう。この作家がもつ才能の限界性については二三の人から聞かされてゐますが、作者自身としてはさういふことを意に介する必要はありませんまい。」と言ってくれる人は少数であった。）と言えば、〈善意の人〉〈善良の人〉であるが故に、今後小説を書いて行く上では苦勞するのではなからうか、というものであった。その嚆矢は中野重治⁴⁹と言ってよいかと思われるが、ここではそのことをズバリ指摘した丹羽文雄⁵⁰の言を引いてみよう。

壺井栄は「曆」で力量をいつぺんに見せたが、同時に限界も見せてしまった。私はこの人と真杉静枝が一番好きだが、壺井栄が作家として大きくなるには生まれつきの良さにうんと邪魔をされるにちがひないのだ。奔放とか不逞とか、さういつた素質の少しも発見のできない、善良無垢な特質が、小説の世界でも些細な破綻も示さないのである。この感じは作家として無気力にも通じる危険がある。

これは誠に単純素朴な現実反映論であつて驚くほかはない。悪事や人殺しがでてこないのは、作者自身の善良な資質の反映ときめてかかっているわけで、その根柢を問われれば答えようがない。

作家にとつて何が重要かと言えばその一つは想像力であろう。もし、作品中に悪事の場面が必要であれば、それは資質から自動的に出てくるものではなくて、想像力によつて組み立てられ、構成されるものである。従つて、それは、いざその場面になつてみなければ発動するか否か、発動するにしても作者が望むようにするか否かはわからないものである。

ただし、それまでの経験からどういふ方面の想像力が、どういふふうに出展しやすいかについてはある程度の推測は可能であろう。このように問題は内部の想像力の発動、展開にあるのであつて、決して外面から判断される「善良無垢」な性格の反映にあるのではない。

仮に、百歩譲つて反映論を認めるとしても、栄を「善良無垢」とする認識自体が間違つているといわなければならぬ。

この事に関しては既に拙稿で述べたので繰り返さないが、今必要な範囲で要点だけを言えば、壺井栄が主婦から作家へと転身する過程において文学修行の経験はなく、佐多稲子と宮本百合子の慫慂で書き始め、その斡旋で僥倖にも作家の仲間入りを果たしたというものであり、これに加えて巷間伝えられる、訪問記者の前に水仕事をしていた台所からエプロンで手を拭き拭き現れた、ニコニコ顔の善良なおばさんというイメージが結びついて、殆ど何の苦勞もなしに主婦から作家になつたとして何の疑いもなく、一般に受け入れられて今日に至つてゐる。

しかし、こうした通説には私見によれば疑問がある。というのはそれは述べられた限りでは正しいし、誤りはないと思う。しかし、それが全てではなかつたということである。

換言すればこれでは最も大事なことは隠蔽される結果になり、スッポリ脱落してしまうのである。

端的に言えば、従来の作家誕生を語る通説は余りにもキレイゴトに過ぎるものであつて、実際は善良でお人好しでニコニコ顔のおばさんの半面に隠された、血で血を洗う地獄の中から這いあがつてきたもう一つの顔を結果として隠蔽することになつていたといわなければならぬ。

栄における作家 即ち、栄の青春は黒島伝治によつて裏切られ、親**家転身の意味** 友の岡部小咲にも出し抜かれ、結婚申込みをされさえすれば、その胸にとびこんでゆく覚悟であつた大塚克三にも裏切られるというように、その青春は無惨な裏切りの連続であり、胸中に刻まれた傷痕は深い。そうした後に、一世一代の勇氣を揮つて強引に押しかけて繁治と一緒に、言語に絶する生活との苦闘の中で官憲の弾圧に抗して生き、その過程で夫婦は互いに意思を十分に疎通させたと思ひ、どんなことがあつても「自分の選んだ結婚を、築き上げてゆかねばならぬ」と信じこんでいた栄にとつて、繁治の裏切りはそれを根底から覆すものであつた。しかもその相手は親しく出入りしていた中野鈴子と知つた時の驚きは察するに余りある。人間への不信と絶望は激しく身を嚙んでいたに相違ない。栄はしかし離婚へと走らず、鈴子をハリトバシて意地を通した。

そうした背景には個々の問題を越えた時代的な状況―転向の季節

の問題もからんでいたと思う。昭和十年前後はプロレタリア文学運動にとつて挫折と解体の時期であり、生の目標を喪失させ、孤立と分裂を強いた。佐多稲子の所では夫に愛人ができて離婚寸前まで行く「くれない」事件が起き、中野重治の場合は、妻の政野が新協劇団員の原泉との矛盾から離婚話をもち出す、というふうになり、出口を失った転向の季節の中でトラブルが同時に多発していたのである。

無論、いずれとも親しい栄は相談を受けて熟知していた筈である（栄の場合も稲子、百合子に相談している）。

しかし、ここで重要なのは、栄の場合、この時点で他の女性とはつきり違っていたのは、彼女が作家でもなく、女優でもなく、タダの人、平凡な主婦としての自分を発見したことである。習作「月給日」「長屋スケッチ」があるがそれは要するにどうということもない習作であつて、おのれはまさしく何者でもなかつた。

事態は明瞭であらう。

たび重なる裏切りによつて栄が得た傷は文学によるほかは癒され得ぬものであり、四〇歳を目前にした栄に、自立が可能な道として考えられるのは、文学しかなかつたのではないか。

触れれば血の噴き出るような、裏切りによる絶望からの再生として作家への転身が企図され、それがおのれにたつた一つ残されたレゾン・デートル、よりすがつて生へとよじ登る一本の細い蜘蛛の糸だつたのではないか。

同時に栄には懸案の材料があつた。末妹の一家の「健と克子」をパンだねに想像力をふくらませ、稲子や百合子にみてもらつて指導をおおぎ、脱稿までに前後八回書き直した。

脱稿までに「八回」書き直すというのは非常に稀な推敲ぶりと言

つてよく、それはこの一作に賭けた作者の意気こみ―自らの存立を賭けた闘いがどれ程激しく、強いものであつたかを証するものに他ならない。完成稿を読んだ稲子と百合子が共に完成を祝し、百合子によつて「大根の葉」と命名され、早速「文芸春秋」に推薦されて掲載が決まると、明けても暮れても「大根の葉」に精魂を傾けていた半年余りの疲れが急に出了たので、上林温泉に休養に行った。そこは前年の秋百合子に同道して知っていたからで、前年同様せきや旅館に一週間滞在して温泉につかり、それ以外はひたすら眠り続けたというところに、この一作に賭けた不眠不休のたたかいぶりがうかがえるであらう。

事実この作品が発表されるや好評をもつて迎えられ、十三年下半期の芥川賞候補作品十六編の中にもあげられたことが示すように、それ以前の作品とは雲泥の差があり、別人の作と言つていい出来ばえを示すものであつた。

この、作品の質的な変化、眼を見張るような、唐突でドラマティックな作品の変貌ぶりは、そこに以前の栄とは一線を画した或断絶があつたことを想定しなければ到底理解することは不可能である。

そしてこの断絶・飛躍を促す契機となつた事件こそ繁治と鈴子の裏切りであり、そこから栄はおのれの存立を賭けて作家への転身を企図し、全精魂を傾注した第一作が「大根の葉」となつて結実したというのが私見の要点である。従つて作家壺井栄誕生の背景には、巷間に流布する稲子や百合子の懲憊によつてたまたま文学の世界に入ったというようなキレイゴトや偶然ではなく、夫に裏切られ、友人に欺かれ、過去一〇年余りに及ぶ家庭生活も理想も破壊され、四〇を目前にして、何のとりえもない、無能な病氣もちの女として弊

履の如く捨てられようとした、血で血を洗う生き地獄から、すさまじい作家への執念を燃やして這い上がっていったという壮絶なドラマが隠されていたのであり、それは「善良」「善意」などという単純で、単色な世界とはおよそかけ離れた、複雑で奇怪な魍魎魍魎の跳梁する世界であった。そこをくぐりぬけてきた人間に向って単純・単色を案ずるとは、まさしく釈迦に説法、笑止千万というべきであろう。

また同じ題材をとりあげる「狭さ」についての指摘もあるが、これも創作の実際をよく知らぬ者の発言と行ってよいであろう。「狭い」よりは「広い」方がよいように思われるかもしれないが、文学の場合には「広さ」よりも「深さ」だ。栄の場合は生涯、自己とその周辺を描き続けて生涯を終えてみれば、故郷の「小豆島」が、そこに生きた人々が、くつきりとゆるぎなく描き出されている。(フォークナーにとつてのヨクナパトーフアがそうであるように)。

最後に栄の才能を見出し、それを引き出した一人である宮本百合子の第一創作集『暦』とその作者についての発言は流石に栄の傍にあってその人と作品を知悉する人の言として多面的に鋭い指摘を含んでいて今日猶有効な発言となつているので以下に引いて本稿を閉じることにしたい。

『大根の葉』を発表してから壺井さんが一人の婦人作家として持つてゐる特色はすぐ一般に理解され、親愛のこゝろをもつて迎へられて今日に至つてゐる。今度新潮賞をうけることになつた事や、それにつれてまた新しく『暦』の書評が書かれたりすることについて、壺井さんはどんな感想をもつだらうか。少し極まりの

わるい顔つきになつて、何だか妙ねえ、といふだらう。そして、心の中で、貰う賞金をいろんな子供や大人や友人たちのためによろこびとなるやうな使ひかたを考へるだらう。

壺井さんのさういふ人柄は『暦』一巻のあらゆる作品の中に溢れてゐて、どんな読者もその人柄に感じる平明な温い積極な親しさについては既に一つの定説をなしてゐる。

けれども、壺井さんについていはれるその人柄のよさといふものの、虚飾なさ、健全さといふものも『暦』一冊を丁寧に読めば、決して単純な生まれつきばかりであつたのではないといふことが考へられると思ふ。相当な年で円熟してゐるといふばかりでもない。この作家の持ち前のなだらかに弾力ある生活の力は、少女時代から結婚生活十七年の今日までの間に、社会の歴史の推移について妻の境涯もなかなかの波瀾を経て来てゐて、しかも、それぞれの時期を本気で精一杯に生きて来てゐる。十六の少女として父さんと浜で重い材木を動かす手伝ひをして働いた時から、ずつと勤勞の生活が経験されてゐて、その経験は、天性の氣質に、一つの現実的な厚いゆたかで強靱な裏づけを与へることとなつてゐる。

作風がある意味で話し上手で、楽な印象を与へるから、壺井さんの作品をよむと成程自分もこんな風にすらすら話して行けばいいのだと思へるかもしれないけれど、強ち誰にでもあつて書けるものではない。模倣されさうで案外それはむづかしい。壺井さんは十年も前から折々小説を書いて来てゐて、自分のあの物語りかたを見出してゐるのである。

作家として自身の特色に対して、壺井さんは、現在の行きかた

で行かうと思つてゐるであらうけれど、文学のひろい意味でそこに一つの限界があることや、自分の文学よりもつと複雑な健全さがあり得ることや、またなくてはならないのにそれが表現されてゐない今日の現実の事情に対して、はつきり知つてもゐる。壺井さんが自分の独特さの反面でそのことも理解してゐるといふところにこそ、この作家の眞の健全さが作品の世界に息づいてゐるのであると思ふ。

(この章 完)

注

* 年月日の表記には元号と西暦とが混合しているが、原文の表記に従い、統一することはしなかつた。99以前については19が、00以後については20が省略されていることは勿論である。

* 栄作品の引用にあたっては文泉堂版全集に収録のものはそれに従つた。

* 右の全集に未収録のもの、及び栄以外の筆者の引用については、漢字を新字に改めたほかは原文のままとした。

- 1 壺井繁治『激流の魚』昭41・11・10 光和堂。
- 2 壺井栄『日記』'99・3・15 壺井栄全集12 文泉堂出版。
- 3 同右。
- 4 壺井繁治『激流の魚』同前。
- 5 同右。
- 6 壺井繁治『激流の魚』同前。繁治の「自筆年譜」(89・3・1『壺井繁治全集5巻』青磁社所収)では10月退社とするが、未詳。
- 7 繁治「自筆年譜」(同前)は北隆館への勤務開始を昭和17年10

月、退社を19年3月と年月を明記するが、壺井繁治『激流の魚』(同前)は年月不詳。ただし、北隆館の退社を「19年3月」とするのは誤り。新編の『壺井栄全集第12巻』(99・3・15 文泉堂出版)所収の栄「茶の間日記」昭和20年1月25日には「繁治、今日限り北隆館を退職。退職金千七百円程を持ちかえる。別に感激なし。昔なら大金なのだが。」と明記されているからである。

8 拙稿「壺井栄論(1)―第三章 激流(二)―」(96・10・25「都留文科大研究紀要45集」)で、転居の詳細については考証したので参照されたい。

9 『激流の魚』同前。

10 注9に同じ。

11 注9に同じ。

12 「壺井先生のこのごろ」昭37・6「平凡」。

13 '40・1・25付宮本百合子から顕治宛書簡(のち宮本顕治・百合子『十二年の手紙』上'65・5・30 筑摩書房に収録)。

14 栄『暦』その他についての雑談(壺井栄全集11 '98・12・15 文泉堂出版 初出は昭15・10・1「三田文学」)。

15 栄「作者と作中人物」(壺井栄全集11 98・12・15 文泉堂出版。初出は昭15・11・1「知性」)。

16 鹿野政直『戦前・『家』の思想』昭58・4・25 創文社。

17 昭15・1・28「読売新聞」5面。

18 昭15・2・1「河北新報」4面。

19 昭15・2・4「東京朝日新聞」7面。

20 昭15・3「文学者」。

21 昭15・3「文学者」。

- 22 拙著『壺井栄』（92・10・22 日外アソシエーツ(株)の「参考文
献目録」の項参照。
- 23 「文芸時評」昭15・3「文学者」。
- 24 I・S〈新潮〉「日本評論」作品評」昭15・3「文芸」。
- 25 網野菊「精進する女流作家」昭14・5・14「大陸新報」4面。
- 26 大谷藤子「女流作家論(一)―作家について」昭14・12・13「河北
新報」4面。
- 27 「戎居仁平治略歴」平成7・1・10 戎居仁平治『壺井栄伝』
壺井栄文学館。
- 28 同右。
- 29 同右。
- 30 同右。
- 31 『千草会会員名簿』昭57・3 戸板女子短大千草会刊。及び
『戸板学園八〇周年記念誌』昭57・10・1刊。
- 32 『錦楓会会員名簿』昭62・3・7刊。
- 33 前引(注27、30参照)の「戎居仁平治略歴」及び「壺井栄年譜」
によれば、仁平治は昭和15年9月高田から埼玉県立熊谷農学校英
語教師として転勤(18年には退職追放)し、近くになったのを喜
び、栄は以後気安く熊谷へ出かける。
- 34 丹羽文雄「見たもの・読んだもの―壺井栄の『暦』(昭15・3
「文学者」)」。
- 35 大山定一「まつたうな小説道―壺井栄氏の『暦』について」
(昭15・5・5「大阪時事新報」4面)。
- 36 竹賢人「改造―八月の雑誌評」昭15・8・3「東京朝日新聞」
6面。
- 37 w・w〈改造〉「中央公論」作品評」昭16・9「文芸」。
- 38 R・S・T「続新旧文壇人の解剖3 竜頭蛇尾の典型 壺井栄」
昭15・10・17「やまと新聞」3面。
- 39 栄「霧の街」の「五」(壺井栄全集1 '97・8・15 文泉堂出
版初出は昭16・9「知性」)。
- 40 同右。
- 41 平野謙「教養時評―文芸」(昭16・10「婦人朝日」)。
- 42 栄「霧の街」昭16・9「知性」。
- 43 栄「ともしび」によせて(昭16・12・26「ともしび」博文館)。
- 44 発代の南山小学校転校計画が昭和17年4月から入学というふう
に企図されたようだが、しかしこれは実際には実行されなかった。
ただ昭和22年9月の二学期から鷺宮小学校6年に転校させ、将来
の自活を考えてピアノのレッスンを始めさせ、昭和24年3月中学
一年終了まで鷺宮に寄留させたことは事実である。
- 45 山室静「文芸月評―「文芸」「文学界」二月号」昭15・4「現
代文学」
- 46 小説には宮本百合子「刻々」(昭8・6執筆。没後発表)同
「小祝の一家」(昭9・1「文芸」)、壺井栄「廊下」(昭15・2
「文芸」)、同「合歓の花」(昭26・10・14「週刊家庭朝日」)など。
作品集・小伝・年譜・解説を収めたものに『今野大力・今村恒夫
詩集』(73・9・25 新日本出版社)がある。
- 47 拙稿「都留文科大学研究紀要49集」'98・10・20 P45、54。
- 48 中村地平「女流新作家論」(昭15・5「婦人画報」)。
- 49 中野重治「春三題(2) 壺井栄」(昭14・5・4「都新聞」1面
「たゞ私は恐れる、かくも善良な人柄は、今後小説を書いて行く

にはなかなか厭な眼を見て行かねばならぬのではなからうかと。」。

50 丹羽文雄「女流作家論(五)」(昭15・3・15「東京日日新聞」5面)。

51 拙稿「隠された真実―壺井栄における作家転身の意味」(94・2・15「言語と文芸110号」おうふう刊)同「壺井栄論⁽¹³⁾―第四章文壇登場―」(04・10・20「都留文科大学研究紀要60集」)。

52 宮本百合子「書評―『暦』とその作者」(昭16・2・27「報知新聞」5面)